

投てき種目におけるリザルトスコアとプレイングスコアの関係

田内 健二¹⁾ 西山 佳歩¹⁾

1) 中京大学

1. リザルトスコアとプレイングスコアとの関係からみた投てき種目の目標値

図1～4は、2024年10月22日時点におけるワールドランキングを基にして、投てき各種目の43位（東京世界選手権のターゲットナンバー“36”の120%）までのリザルトスコアとプレイングスコアとの関係を示したものである。なお、43位までに日本選手が入っていない場合は、日本最上位選手を加えてある。すべての種目において、両者は二次曲線に最もフィットする関係にあることが明らかになった。このことは、リザルトスコアが高い選手ほど、より高いカテゴリの競技会にエントリーできるために、より高いプレイングスコアを獲得していることを示すものである。したがって、WAのワールドランキング制度は、いわゆる強い選手ほどより高いパフォーマンススコア（リザルトスコア+プレイングスコア）を獲得しやすい制度であるといえる。

このことを前提にして、各種目においてターゲッ

トナンバーに入るために重要なことは、まずは最低限必要なリザルトスコアを獲得すること、次に同じリザルトスコアであれば、より高いプレイングスコアを獲得することであろう。今回提示した図1～4は、このことを評価するために役立つ情報を与えてくれる。

まず、最低限必要なリザルトスコア（＝二次曲線最下部付近のX軸の値）についてみると、種目間で多少のばらつきはあるが、おおよそ1040～1100ポイントが必要であるということがわかる。このことから、表1に各種目の最低限必要なリザルトスコアに対応した記録を示した。日本選手においては、5試合の平均記録がこの水準にいくことをまずは目標としたい。現状においては、男女のやり投ではこの水準を超える選手は複数名存在している。一方、他の種目についても男女砲丸投以外の種目では、高い水準ではあるが決して不可能な記録ではないと考えられる。

次に、同じリザルトスコアであれば、どの程度がより高いプレイングスコアといえるのかを考える

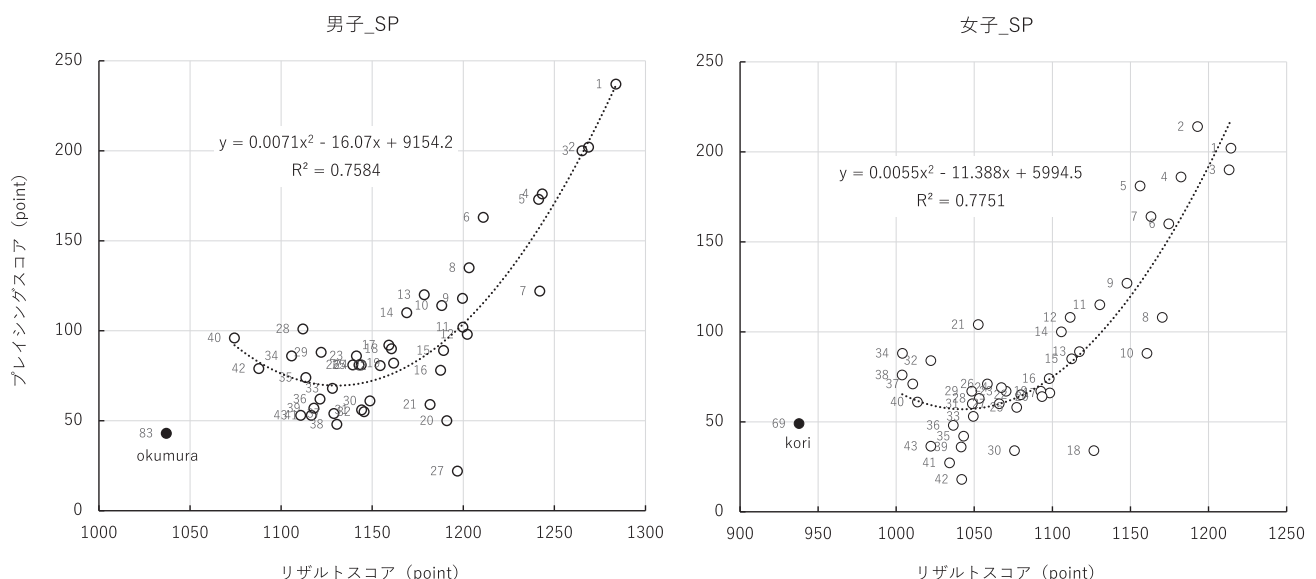


図1 男女砲丸投におけるリザルトスコアとプレイングスコアとの関係

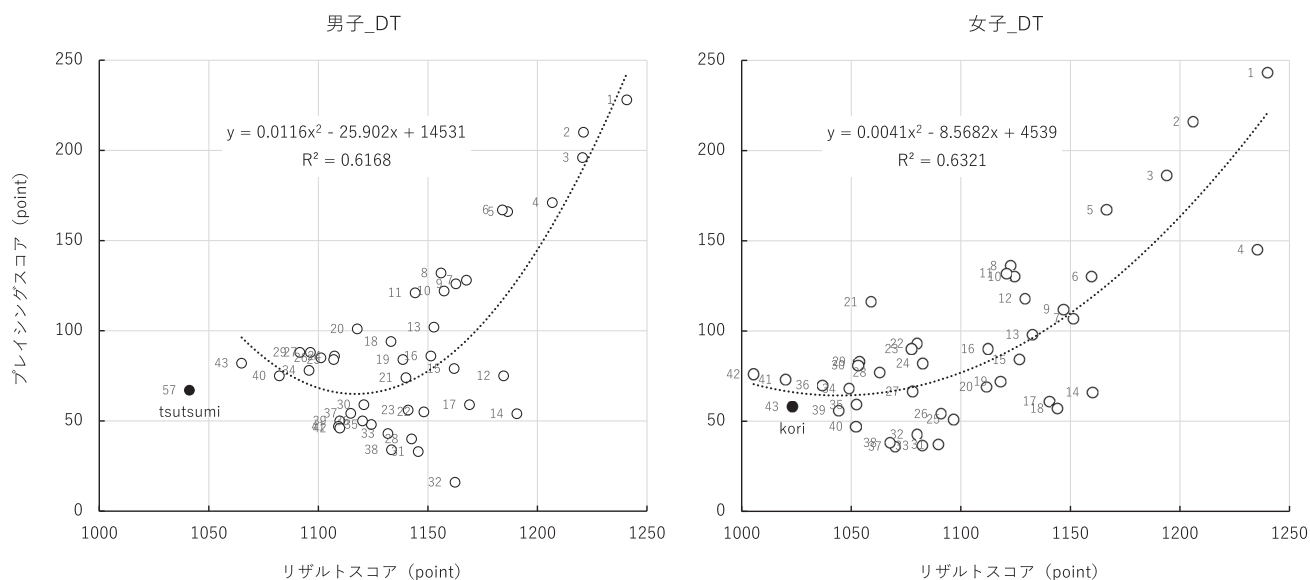


図2 男女円盤投におけるリザルトスコアとプレイシングスコアとの関係

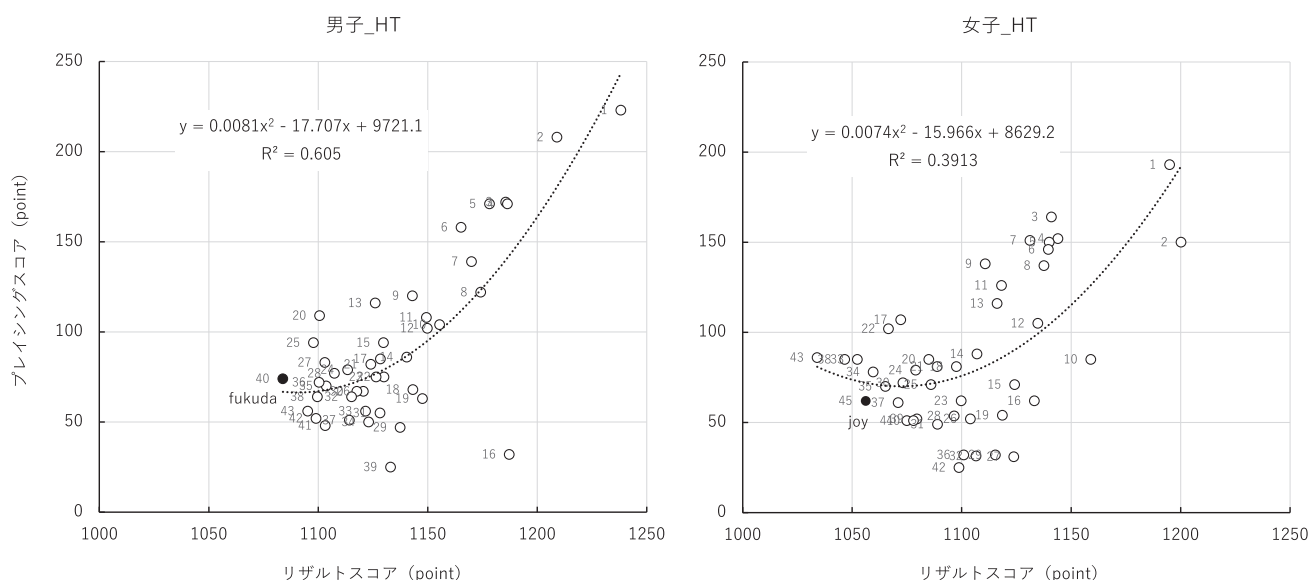


図3 男女ハンマー投におけるリザルトスコアとプレイシングスコアとの関係

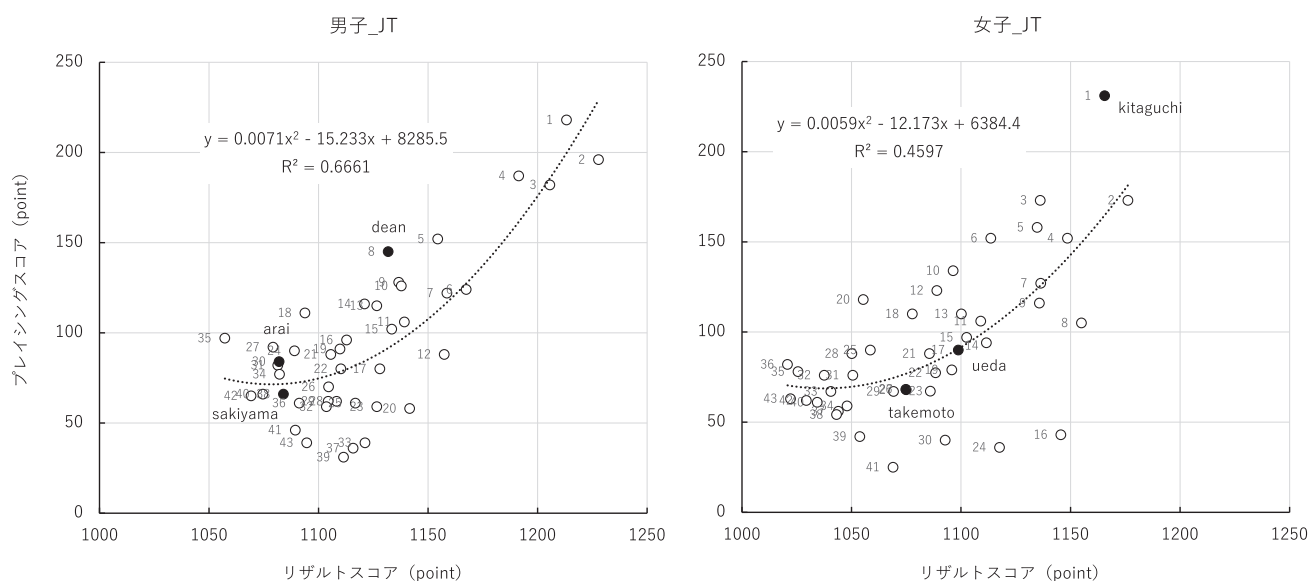


図4 男女やり投におけるリザルトスコアとプレイシングスコアとの関係

表1 各種目における最低限必要なリザルトスコアおよびそれに対応した記録（5 試合の平均値）

男子	最低限必要な リザルトスコア	対応記録	女子	最低限必要な リザルトスコア	対応記録
SP	1100	19.65m	SP	1100	18.28m
DT	1100	62.13m	DT	1050	58.82m
HT	1100	73.36m	HT	1050	67.30m
JT	1075	78.13m	JT	1040	57.93m

必要がある。このことについて、各種目のグラフ内に描かれた二次曲線上に位置する選手は、自身のリザルトスコアに対して妥当なプレイングスコアを獲得している選手であると評価できる。したがって、二次曲線の上側に位置した選手は、同様のリザルトスコアに対してより高いプレイングスコアを獲得した選手であり、下側に位置した選手は反対にリザルトスコアに対して妥当なプレイングポイントを獲得していない選手であると評価できる。このことから、先に示した最低限必要なリザルトスコアの場合、おおよそ 60～70 ポイント（＝二次曲線最下部付近の Y 軸の値）以上のプレイングスコアを獲得しなければならないということになる。この 60～70 ポイントというのは、競技会カテゴリでいえば C カテゴリの優勝（60 ポイント）以上に相当する。したがって、世界大会におけるターゲットナンバー内を目指すためには、相応のリザルトスコアを有した状態で C カテゴリ以上の試合にエントリーし、その試合において良い記録と順位を獲得する必要があると解釈することができる。

2. ディーン元気選手におけるリザルトスコアおよびプレイングスコアの獲得事例

ディーン選手は、2012 年ロンドン五輪に出場後、長らく国際舞台から遠ざかっていたが、10 年ぶりのシニア世界大会となる 2022 年オレゴン世界選手権に出場し、続くブタペスト世界選手権、およびパリ五輪に出場した選手である。図 5 に、ディーン選手における世界大会（2021 年～2024 年）エントリー有効期間内のリザルトスコア、およびプレイングスコアの変遷を示した。2021 年（東京五輪期）から 2024 年（パリ五輪期）にかけて、年々プレイングスコアが上がっており、特に、2024 年は 2023 年よりもリザルトスコアは低くなっているにも関わらず、プレイングポイントは増加していた。このような獲得状況に至った経緯を以下に解説してみた

い。

ディーン選手は、コロナ禍であった 2020 年に無観客で開催されたゴールデングラプリにおいて、8 シーズンぶりに 84.05 m という世界トップレベルの記録を投げ、2021 年に延期された東京五輪への出場を目指せる位置にいた。しかし、結果として東京五輪には出場できず、その原因の 1 つにはワールドランキングによるエントリーが初めて採用されたことが挙げられる。このとき、ターゲットナンバーに入るための具体的なポイントを予測することが難しく、彼は 1200 ポイント程度が必要であると考えていたようであった。これに対して 2021 年シーズンの前半において思うようなポイントを獲得できなかったことから、ワールドランキングの順位での出場よりも、標準記録（85.00m）を突破しての出場を優先することに方向転換することになった。そのため、日本選手権など、エントリー締切間近の試合において必要以上に記録を意識しすぎたため、かえって本来の力を発揮できず、標準記録を突破することなく、ワールドランキングの順位でもわずかなポイント差で落選してしまった。なお、勝負の世界に「たれば」はないが、手堅くリザルトスコアとプレイングスコアを獲得していれば、十分にターゲットナンバー内に入る可能性はあったと思われる。

このような苦い経験を踏まえた上で、2022 年シーズンでは、ワールドランキングの順位、特にプレイングスコアの獲得を意識して、より高い競技会カテゴリへのエントリーを積極的に行った。その結果、2021 年と比較して 2022 年ではプレイングポイントを大きく増加させることができ（図 5）、余裕を持ってワールドランキングの順位でのオレゴン世界選手権への出場を果たすことができた。このオレゴン大会においてファイナリストになったことから、翌 2023 年シーズンでは競技会カテゴリの高いダイヤモンドリーグへのエントリーを試みた結果、2 試合の GW カテゴリへの出場が実現し、2023 年シーズンのプレイングスコアの増加を果たすことがで

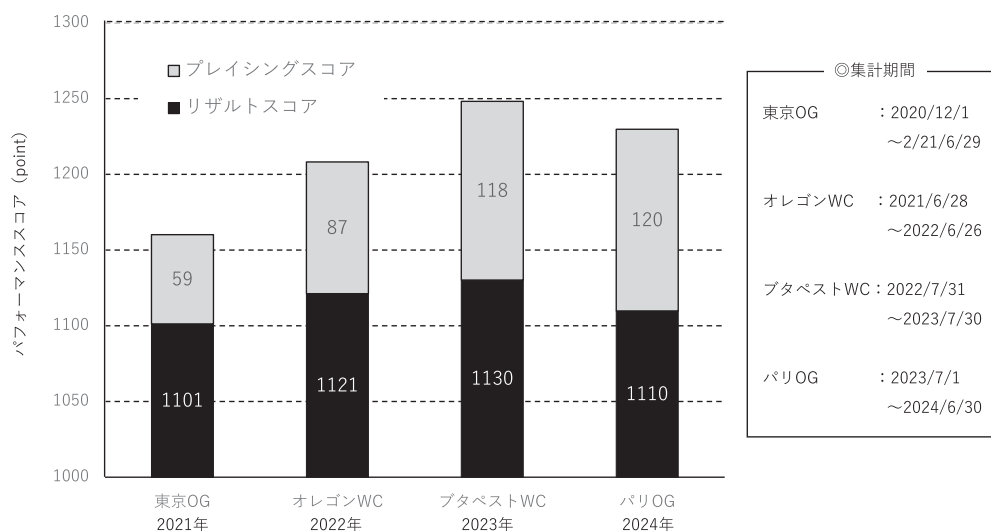


図5 ディーン選手におけるリザルトスコアおよびプレイシングスコアの変遷

表2 ディーン選手における出場競技会のカテゴリの変遷

	OW	DF	GW	GL	A	B	C	D	E	F	計
2021年					1	1	4			5	11
2022年	2※				1	3	2	1		7	16
2023年	1		2	1	2	3	1	1		2	13
2024年	1	1	3		1	2	1			1	10

※22年のOWの2試合は、オレゴン世界選手権の予選，決勝を示す。

きた。さらに、ワールドドラキングの上位者は、より高い競技会カテゴリへのエントリーが優先的に行われることから、2024年シーズンではリザルトスコアとしては2023年よりも低くなったが、プレイシングスコアは増加させることができ、パリ五輪の出場へとつながった（図5）。上述してきた2021年から2024年シーズンまでに出場した競技会カテゴリを振り返ると、表2に示したように2021年ではCカテゴリ中心であったものが、2022年ではB以上、そして2024年ではGW中心に変化してきたことがわかる。このことは、ディーン選手が高い水準でリザルトスコアを残せたという実力ありきではあるが、2021年の反省を活かして、2022年以降はリザルトスコアに加えてプレイシングスコアの獲得をかなり意識してきた成果であるともいえる。

以上のことから、より多くの日本選手が世界に通用するリザルトスコアを獲得し、同じリザルトスコアであれば、プレイシングスコアにおいて他国選手よりも優位なワールドドラキングの順位を獲得できる

ように、本稿が少しでも役立てられれば幸いである。